

自然学

富田惣七*

今西錦司先生といえば、素人の私も何かにつけて思い出すお名前です。

靈長類の研究、特に『イマニシ進化論』で、ダーウィンの進化論に真っ向から対決している学者だと聞いています。専門外のことでも私は、先生が何かにフト洩らされる言葉に、全身を引き込まれるほどの感銘を受けます。

私には、時折想い出す二つの言葉があります。

その一つは、去年の研究報告にちょっと書きましたが、フォイエルバハという人の「自然科学は哲学と結びつかなければならない」という言葉で、もう一つは、この今西先生の「自然科学ではなくて、自然学でなければならない」という言葉であります。

この二つの言葉は、根本は一つの言葉だろうと思います。

そしておそらく今日の、どんな学説や、研究や、その論旨や成果とは、比較を絶した重大な言葉ではないかと思います。

いろいろな学問や、技術の目指しているところとは隔絶した方向、或いはそれは全く逆の方向と言ってよいかも知れません。

そしてそれは今、人類に対する重大な警鐘でもあると思います。

× × ×

日本では大正時代の初め頃から — ヒューマニズム — というものが声高になってきました。有島武郎や武者小路実篤等の『白樺』などがその先達をつとめました。

ところがこの人本主義 — 人道主義の主張に、同じ根から出たものか、近代の社会が育てゝいく個人主義が重なって、やがて初心とは全く違った方向へ、どんどんはずれて行きました。

そして、こういう風潮からやがて「わたしは人間である」という気負った意識が産まれることになり、そして到頭、人間は他の生物とは全く別の優れた存在であるという妄想がうまれ、地球上のあるじであるかのように、勝手に地球を荒らしまくっていくのです。

近頃は人権という言葉も耳に脳（たこ）ができる程よく聞きます。

人権、結構です。しかしその言葉の裏で、すべての生物権が蔑がしろにされている。すべて人、人、人で、トンボは虫けらで、せいぜいのところ標本づくりの材料どまり、名前を知らない草は雑草で、ただむしりとられるだけ。みんなその調子。人のことにしか本気の心が動かない。それが人権という口調の陰に隠れています。

× × ×

『動物園』という滑稽な場所の情景を思い出してみましょう。

* 福井市照手1丁目2-9

そこには、入園料を払って入ってきたホモ・サピエンスが檻の中の生きものたちを、このものたちも自分らと同じ空気を吸い、同じ水を飲んでいるものなのだ、などとはつゆ考えず、「万物の靈長」という眼で、檻の中を眺めています。

そこには人間サマの眼だけが働いていて、檻の中は向う側で、自分の横に並んでいるものだ、とは微塵も考えていません。

× × ×

論理が体系を組み、その部分、部分が次第に細分化され、専門化されていくうちに——本来——というものからは、どんどん遠ざかっていきます。

論理の世界は、丁度物に就いての弁証法と同じように、質から量へ、そしてその量が次の質になっていきます。

そのため、もともとはこうであるべき——というものとは全く違った世界を作ってしまうのです。否応なしに沢山の学問は、いろんなモメントで結びついていって、一つの専門分野の中では思ってもみなかつた方角へ流れていき、考えもつかなかつた——もの——を作ってしまいます。

そしてこの様にして、原子爆弾もつくられました。

これからも、いろんなものがどんどん作られていくでしょう。

残念ながら人間は、これを進歩と考え、その様な状態が非常に高度になった国を——先進国——と呼んでいます。

科学万能、だからそれを作り出す人間の能力は万能で、そこに無限の可能性が潜在しているのだ信じています。それが近代から現代への人間が膨らましてきた科学の夢であります。

秋間実先生が「技術のユートピアへの幻想」と呼んでいられるのは、この様な——例えばわが国のように、政治家はじめ多くの人達の抱いている、お目でたい夢心地を指しているのです。

× × ×

今西先生の言葉は、そういう論理というものの性質、そしてその根底にあるものへの警告であります。そしてこの儘では人類は、自からの手で自からを滅亡させるしかないという瀬戸際で「いいかげんに目を醒ましたらどうだ！」と言っていられるものであります。

学者たちの中には「そんなこと言ったって、もう遅いよ……」と言っている方も多いのですが、だからと言って、このまゝ懐手でそれを待っているわけにもいきません。

九州大学の安松京三先生の『天敵研究』や、横浜大学の青木淳一先生の『土壤動物学』や、『雜木林の博物学』の足田輝一先生などの努力は、わたくしたちに「おい、お前らも、ちゃんとせ」と呼んでいるのです。

× × ×

それらの先達の人々が言っていることは、嘗ってファーブルが、ひとつの昆虫に二十年の歳月をかけたあとに——本能——という言葉でしか考えようのないものにぶつかって——自然——という論理を越えた無限の世界へ眼を開いた、その時のそのまゝの再現であります。

そしてそれが、唯一の真実ではないでしょうか。

× × ×

自然学

どんなに科学が進んでも、縄文土器ほどに、殆んど完全なと思われる美しさをもつ形は生れてこないのです。

それを作った人たちは、格好のよいものを作ろうなどという作意は全くなかったのです。

ただ日常に必要なある入れものを、お前も俺も、というようにして作ったのです。

そのようにして作られたものが、あれ程に強い、完ペキの美しさをもっていると謂うことは、人間は本来たくまとして、そのような美しいものを作るのだ、という事なのです。

それから後の人間の歴史をみても、そういうものが、決して進歩、文明、科学文化に依ってもたらされるものではない、という事が明らかであります。

いやむしろ、それは、それらに依って失われていくものだ、という事を、人間の辿ってきた足跡が物語っています。

つまり、簡略して言うなら、それは、本来持っている世界の中に、余計なもの、『自然でないもの』即ち人為的な論理的なものが入りこんできた、入りこまざるを得ない営みの転移が繰返えされていったからでありましょう。

× × ×

ですから今、重大なことは、そのようにして入りこんできたものを、如何に排除していくか、『本来のもの』をどのようにして呼び戻していくか、という事であります。

そういう努力がいろいろな分野で先覚の人々によって発起されています。

勿論一方の学問や技術への偏向した流勢は、ますます強大になっていくでしょう。

× × ×

もしも人類の過去に、平明なものへの指向が、ある賢明な契機と継承によって恵まれていたとしたら — こんなに急に照葉樹林が消えてゆくことも — 自動車の通るあらゆる道路添いの土壌から強い発ガン性物質が出てくることも — 命の泉である地下水の汚染も — 酸性の雨もなかつてしまふ。

× × ×

川の魚の、海の魚の明日はどうなっていくのか。

あの山の鳥たち、遠く海を渡ってやってくる鳥たちの明日に何が待っているか。

賀茂川からカゲロウが消えていったように、足羽河原から秋鳴く虫が消え去るのは何時の日なのか。

そして、それらの事が、明日の人間のどのような姿として考えられるのか。

この事を、人々の前に示して見せることこそ、やはり博物館の負わねばならない大事な役目ではないでしょうか。

× × ×

最後にもう一度、今西先生の次の言葉をよく考えてみたいと思います。

「自然とは、植物も、ミミズも、サルも、人間も、ひとしく横に並んだ存在である」

(昨年、一昨年の私の拙文 — 自然科学 — , — 自然科学つづき — は裏からの
言い方でしたが、今度は表から — 自然学 — としました)